

激動の時代を
新しい視点から学ぶ
日本近現代史

日露戦争

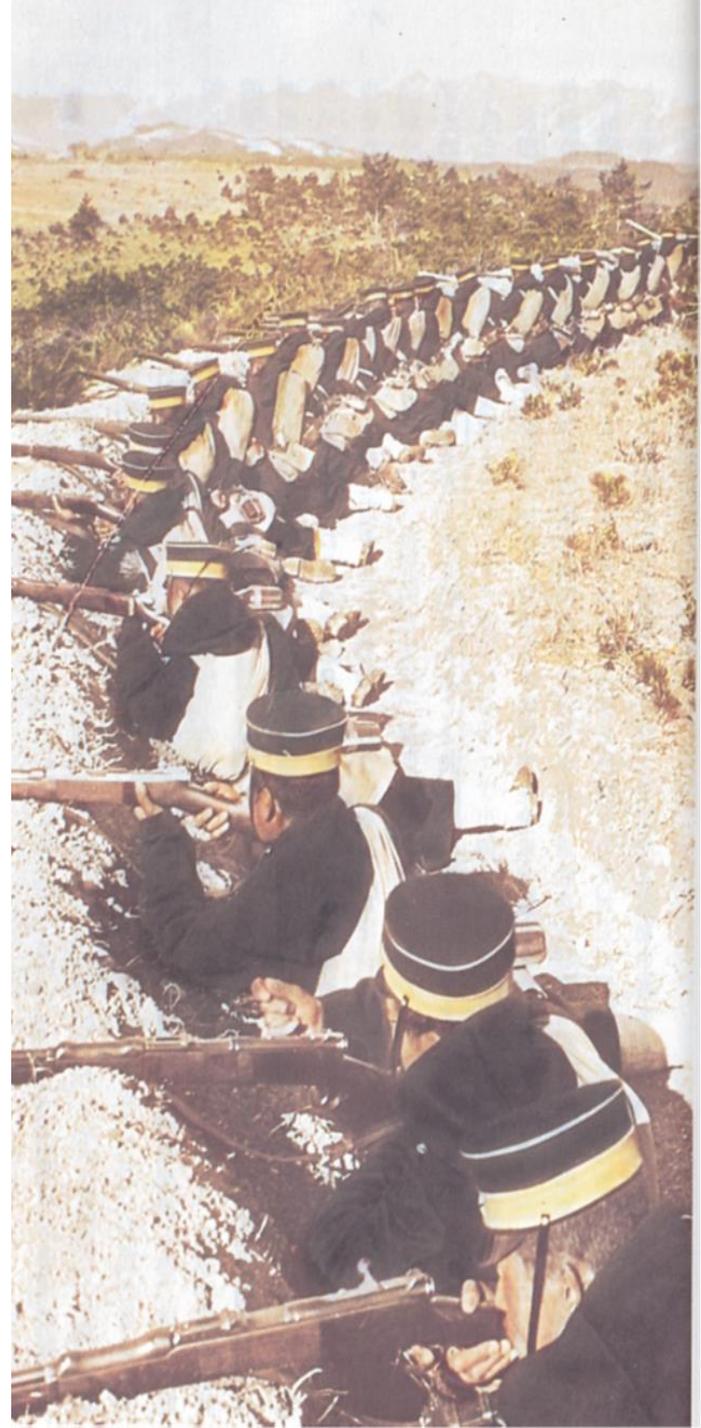
(<http://jugyo-jh.com/nihonsi/>)



I,はじめに 日露戦争とは

- ① 1904年（明治37）2月から翌年にかけて、
- ② 満州・朝鮮の支配をめぐる戦われた日本とロシアの戦争。
- ③ ロシアの南下政策に対して日本は英・米の支持の下に強硬政策をとり開戦。
- ④ 日本軍は旅順攻略・奉天会戦・日本海海戦で勝利を収めたが、
- ⑤ 軍事的・財政的に限界に達し、ロシアでは革命運動の激化などで早期戦争終結を望み、
- ⑥ 両国はアメリカ大統領ルーズベルトの勧告をいれて1905年9月ポーツマスで講和条約を締結した。

（大辞林 第三版）



II, 日露戦争はなぜ起こったのか？ ～ロシアは危険な隣人だった？～



ヴィツテ



ニコライ2世



ベゾブラゾフ

日露戦争といえは

司馬遼太郎「坂の上の雲」

1968～72年までサンケイ新聞夕刊に連載
日露戦争を題材に、「青年期の日本」を描く

・ **等身大の明治の青春像**

(秋山好古・真之、正岡子規ら)

・ **従来の日露戦争像を一変**させるリアルで
ちみつな描写

軍事技術、経済、情報・諜報、きわどい勝利、
軍神・乃木大将の評価など

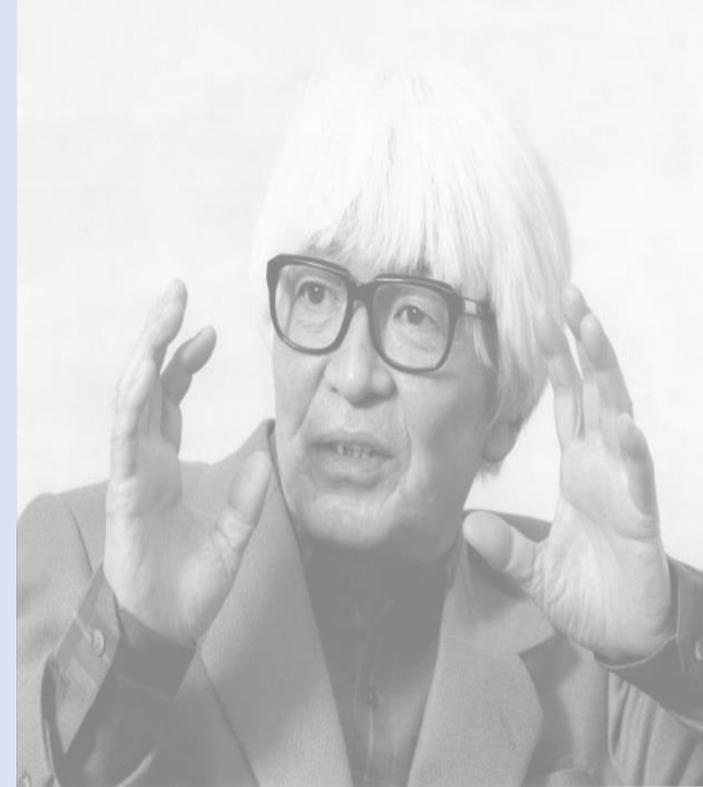
・ 「**楽天的な明治**」と「**愚劣な昭和前期**」
を対比し、明治の日本を評価



司馬遼太郎「坂の上の雲」
(1968～72)
戦前・中を「愚劣な時代」とする司馬は、明治時代・日露戦争を「明朗な時代」として描き出そうとした。

司馬遼太郎の「日露戦争」

- 日露戦争の原因は、朝鮮と満州である。満州をとったロシアがやがて朝鮮をとる。これは極めて明白である。日露戦争にもし日本が負けていれば、朝鮮はロシアの所有になっていたことはうたがうべくもない。
- 日本は、その歴史的段階として朝鮮を固執しなければならない。もしこれをすてれば、朝鮮どころか日本そのものもロシアに併呑されてしまうおそれがある。
- ロシアは後世の史家がどう弁解しようとも、極東に対し、濃厚すぎるほどの侵略意図を持っていた。



⇒本当にそうか？

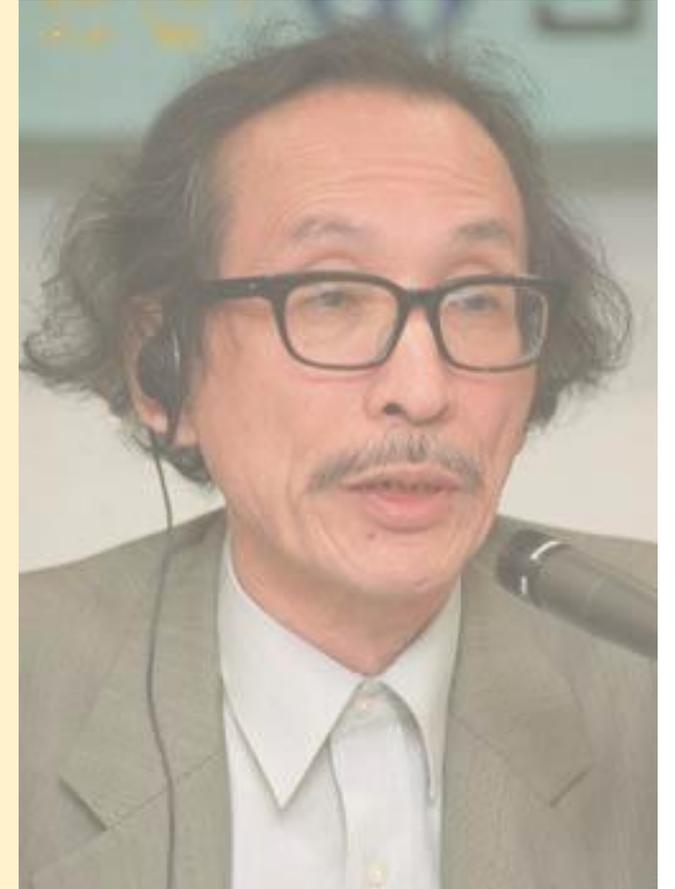
現代歴史学の日露戦争像(1)

和田春樹『日露戦争 起源と開戦』(2009)

ロシアの態度は最初から消極的だった。
ロシアは広大な国土をもてあましていた。
ロシアは奇襲攻撃を受け、抗議の宣戦布告を出すなど完全に受け身であった。

戦争をすることをロシアが望んでいなかった。

日本は「韓国ノ保全」と宣言したが、実際は日本が朝鮮をみずからの支配下に置き、保護国とすることを目的とする戦争をすすめた。



<和田によるロシア像>

全般的には朝鮮への関心が薄いロシア

- ①朝鮮の「開国」には興味薄 → 条約も遅れて締結
沿海州の開発は朝鮮人労働力に依存→悪影響を懸念
- ②海軍の興味…中国・太平洋への航路確保＝朝鮮海峡に根拠地を
ウラジオ港の凍結→不凍港の必要性、長崎港が根拠地に
- ③朝鮮国王のロシアへの期待←清や日本の圧迫や横暴
国王に「同情」したドイツ人顧問やロシア公使がリード
- ④ロシア政府＝イギリスへの対抗上、朝鮮に接近
- ⑤一部の知日派（ヴォーゲルら）→日本の軍事力に脅威を感じる

現代歴史学のロシア像(2)

伊藤之雄 『山県有朋』 (2009)

日本側が信じ込んでいたのはロシアが一貫して南下を目指し、満州から朝鮮半島への支配を狙っているというイメージだった。

しかし実際のロシア側の事情はそうではなかった。

皇帝ニコライ二世は日本との戦争を望んではおらず、日本の韓国における、ロシアの満州における利益を相互に承認しても良い、という満韓交換の立場に立っていた。

しかし日本を軽んじており、日本がロシアと戦争に踏み切る勇気があるとは考えていなかった。

<ニコライのきまぐれのせいで>ロシアの極東政策は混乱していた。意思決定にひどく時間がかかる非効率な国家だった。



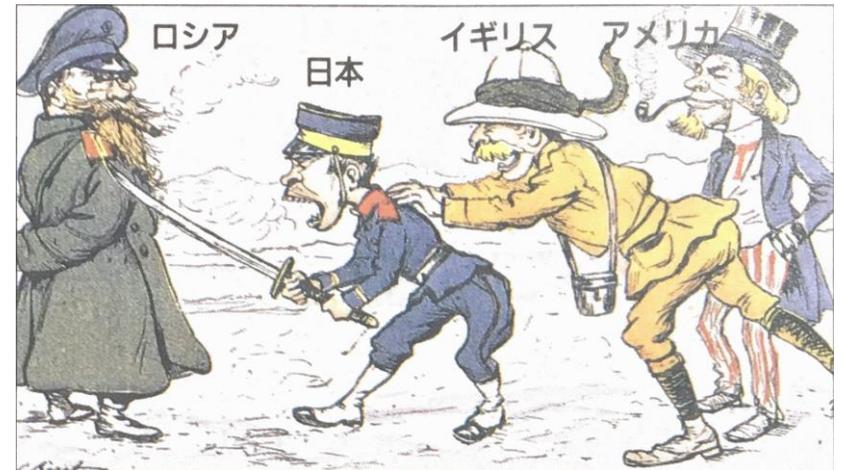
なぜ「危険なロシア」像が生まれたのか。

①ロシアの宿敵**イギリスの目**で見ていた日本
通信社や新聞社の影響

②**仮想敵としての「ロシア」**
→**万国対峙のシンボルとしてのロシア**

他の列強とは異なった動き
→意図的に脅威を誇張した側面も

③「**神経症**」化する国民
→「**三国干涉**」の恐怖
→**対馬占拠事件**という「**前科**」も



「危険なロシア」の象徴 シベリア鉄道計画

蔵相ヴィッテらが中心・1885発表→91着工

ヨーロッパと東・中央アジアでの流れを活発化
＝経済発展

日本国内でも期待する声が・・・

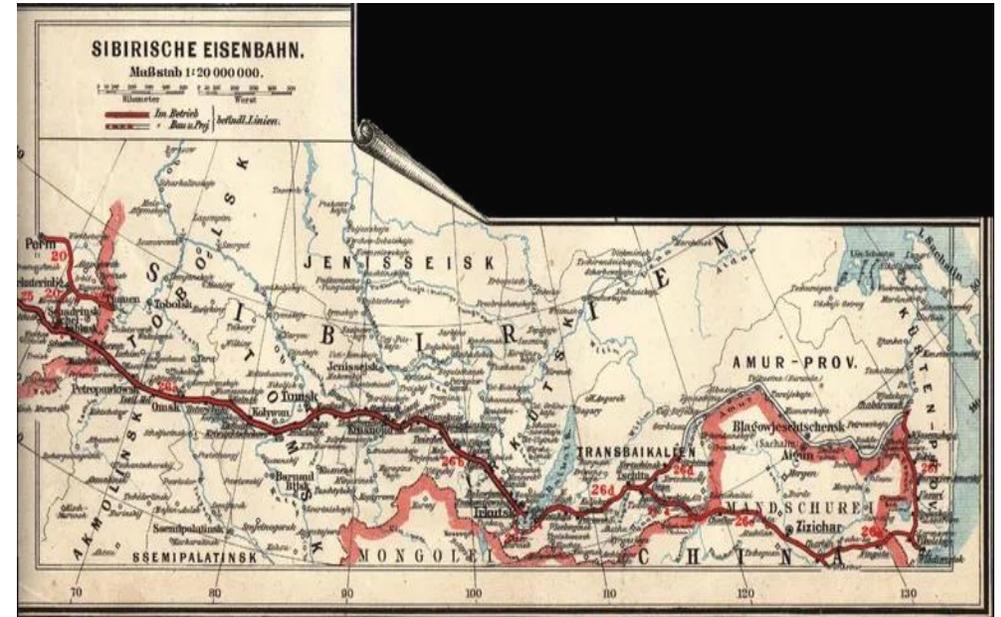
→イギリスの軍事・経済覇権を脅かす
潜在力を持つ。

→極東における力関係の激変へ



1890年、山県首相「利益線」演説

「利益線」朝鮮にロシア進出の危機があると強調



<日露両国の対立点：朝鮮＝韓国への対応>

日清戦争下の方針変更＝「保護国」化

①日清戦争まで＝他国の支配下に置かれると困る！

朝鮮の独立を維持し改革を援助する（中立国化）？！

②日本優勢のなかで

「朝鮮の保護国化」方針を閣議で決定

「名義上独立国と公認するも、帝国より間接に直接に、永遠もしくは長時間、その独立を保翼扶持し、他のあなどりをふせぐるの労をとる」（陸奥が示した乙案）

③保護国化に適した改革を促進＝井上馨を派遣

朝鮮の国内改革（日本型立憲君主制採用＝国王の権限削減、日本人官吏の採用）を促進

⇒国王夫妻の反発⇒三国干渉＝日本は弱点を暴露される

閔妃殺害事件（1895）

日清戦争中から見られた朝鮮の反日気運は、三国干渉後一層大きくなった。これに対し、新任の日本公使**三浦梧楼**（予備役陸軍中將）は、閔妃を反日の元凶と考え、閔妃と敵対していた大院君をかつぎだすとともに、閔妃の暗殺を謀った。

明治28年10月7日夜半から8日早朝にかけて、日本軍に指導された朝鮮の訓練隊・日本軍守備隊・日本人警察官・大陸浪人らが景福宮に入り、王宮護衛の侍衛隊を撃破し、王妃の寝室に乱入、閔妃を惨殺、死体を凌辱、石油をかけて焼いた。

この凶行は、ロシア人やアメリカ人に目撃され、ソウル市内はたちまち騒然となった。

（中塚明「閔妃殺害事件」『国史大辞典』より）



露館播遷 (1896)

閔妃殺害事件

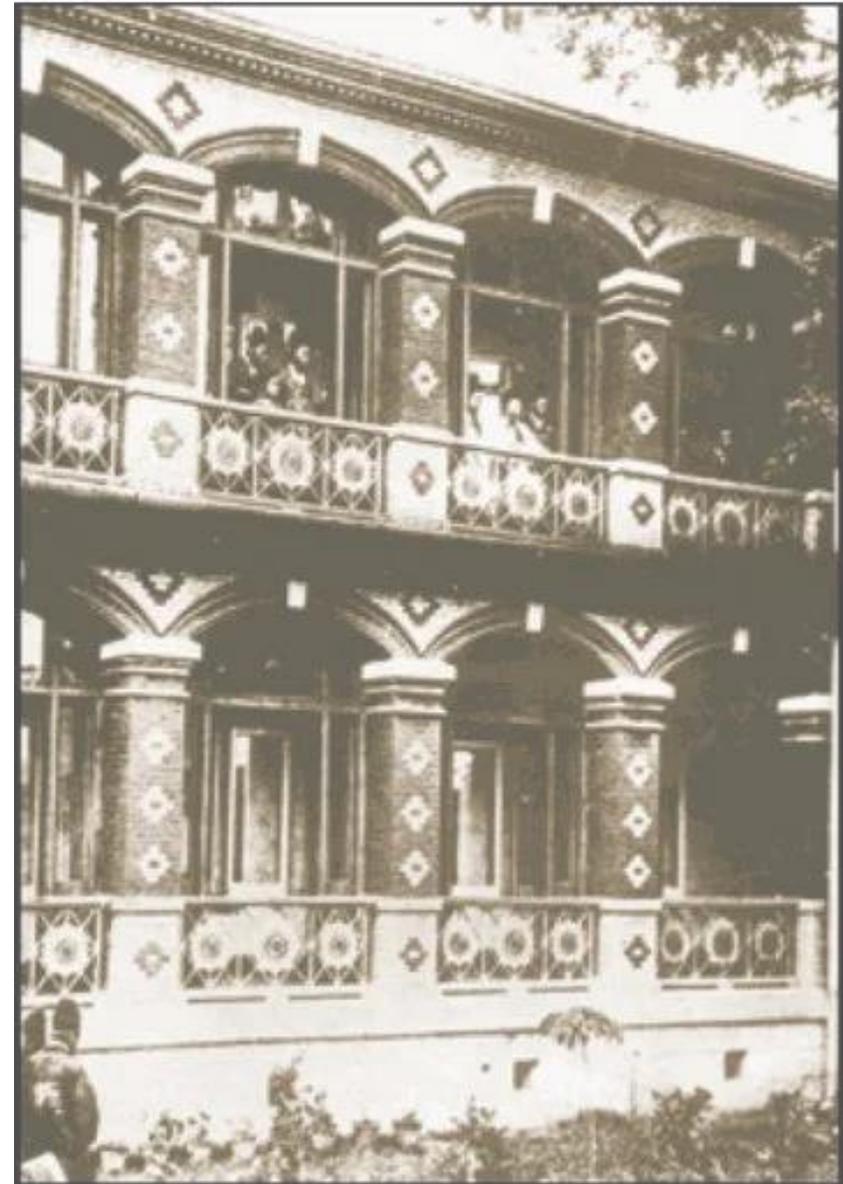
- ・ 日本側は防戦一方に
- ・ 親日派政権…事件の隠蔽・急進的改革の再開

初期義兵運動の発生

「国母復讐」・断髪令反対の武装闘争発生

露館播遷 (1896/2~97/2)

- ① 高宗一家がロシア公使館へ逃げ込む。
- ② 改革無効と内閣不信任を宣言→首相ら殺害される
- ③ 親露派の政権の成立 = ロシアの影響力増大
→ ロシア軍事顧問団の派遣など



ロシアの朝鮮進出（日清戦争以後）

三国干渉→閔妃殺害事件→露館播遷→軍事顧問派遣

①背景…日本の影響力拡大をきらう国王夫妻と民衆

②国王夫妻に同情、呼応したロシア外交官

ロシア外交官ウェーバーのスタンドプレー

③ロシア本国に日本と争っても朝鮮進出を図る意図は？

朝鮮における日本の影響力は圧倒的…経済力の浸透

④日本側の強い「危機感」＝弥縫策の面も

⇒山県訪露＝朝鮮分割案提示、ロシア側は拒否

ロシア極東戦略の変更＝満州への浸透

旅順港租借とルート確保

- ① 1896露清密約＝対清借款・東清鉄道敷設権を獲得
- ② 1898関東州(旅順軍港)の租借⇒補給路確保の必要
 - 1) 中心的な補給路としての「南満州鉄道」の安全確保
鉄道破壊への対応の必要性
日本の攻撃を懸念＝朝鮮北部の中立化・鴨緑江沿岸「開発」
 - 2) サブルートとしての海上ルート確保
対馬海峡・黄海の安全通航の保障をもとめる
→馬山の租借、海軍拠点建設計画→日本のシーレーンと衝突

ロシア極東戦略の変更⇒「満州」をめぐる対立

「満州」進駐⇒軍事占領へ

①1900 義和団事件…東清鉄道破壊事件発生

鉄道守備を口実に満州に侵入・駐屯（軍事占領へ）

②いったん占領し、既成事実が生じると…！

鉄道防衛？勢力圏・植民地化？利権？

⇒しだいに占領の長期化、清と撤兵で合意するが…

③日・英…ロシアによる満州支配とみなし、強く反発

⇒露清間の撤兵合意にも反対⇒日英同盟へ

⇒日露交渉…満韓交換論の提示も

④ロシア、第二次撤兵を実施せず＝占領の既成事実化

大国ロシアのメンツ？プライド？

1901以降の日露の対立＝交渉内容

ロシアの満州支配・撤兵と、日本の韓国支配容認

①無条件の満州撤兵は困難＝「みかえり」が必要⇒英・日が妨害

②韓国への信義・鉄道の安全＝韓国が中立・非軍事がベスト

③日本に対する危機意識（ヴォーガク・ベルブラゾフ）

「新路線」…「満韓」国境の軍備増強・極東での対応一本化

軍事力を誇示＝「力での対抗」→いっそうの緊張の高まり

④「日本軍からの攻撃はない」と過信

⑤交渉の引き延ばし、とくにシベリア鉄道全通をまつ…

＝開通すれば圧倒できる→日本側のあせりを引き出す結果に

「専制主義大国」 ロシアの宿命

① 専制国家としての問題性

それぞれの部門が勝手に行動。

→ 国家意思のブレ、皇帝の人格に依存

② 「大国」としてのおごりとプライド

→ 日本軍への過小評価

→ 見返りなく撤兵できない。韓国をみすてられない。

→ 妥協案(日本による韓国占領の容認)提示を躊躇

③ 「危険な隣国」への「危険な処方箋」

→ ヴォーガク・ベゾブラゾフらの「新路線」

= 圧倒的な武力で日本の好戦論を封じ込めようとする。



開戦の背景～日本のあせり、ロシアの油断

日本軍のあせり

- 1) 陸軍 = シベリア鉄道全通以前の開戦・
早期決戦をめざす
- 2) 海軍 = ロシア海軍を壊滅させねば韓国の
支配は維持できない = 全面戦争しかない

ロシアの油断

- 1) 日本国内の強硬論への無理解と過剰反応
「新路線」 = 軍拡、「シベリア鉄道」全通へ
- 2) 日本軍の攻撃の可能性を軽視
韓国占領のみと判断⇒皇帝は韓国占領を容認
- 3) 不意を突かれる⇒準備不足・国民の支持不足



ニコライ2世
ロシア皇帝は日本による韓
国支配を容認する姿勢を示
していたが。



日露開戦を決した御前会議
(1904年2月5日)

Ⅲ，日露戦争の開始

～日本とロシア～



日清・日露両戦争に参加した兵士の写真

開戦～奇襲攻撃ではじまる

①2月6日韓国での軍事行動開始

②2月7～8日 奇襲攻撃

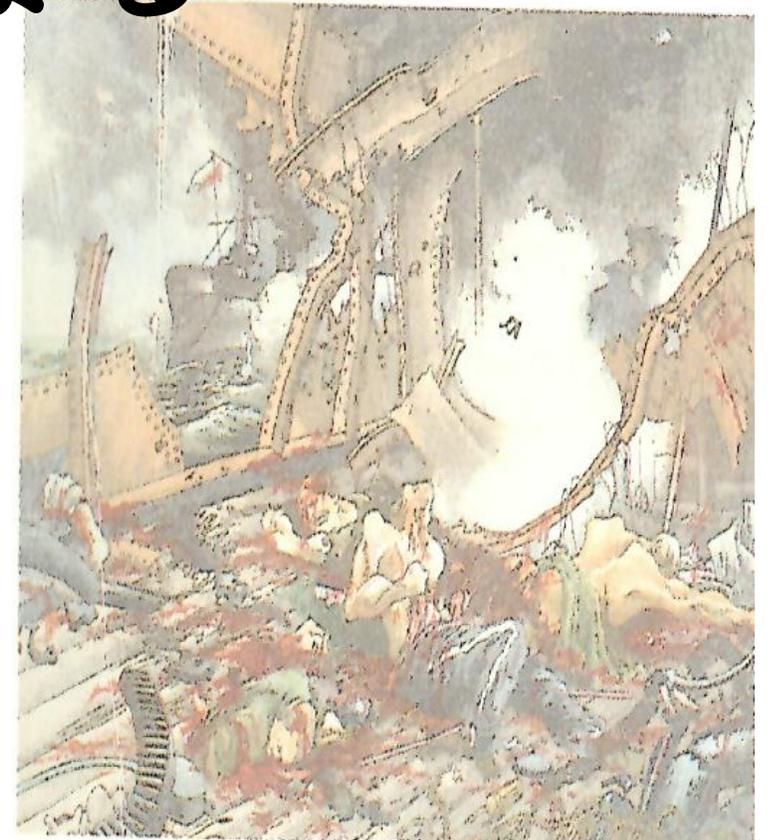
- 1)日本海軍、韓国・仁川のロシア艦船攻撃
- 2)旅順軍港・ロシア太平洋艦隊を奇襲

③宣戦布告

ロシア：2月9日、日本：2月10日

※日本は2月6日、「国交断絶」の最後通牒を
ロシア側に手渡す

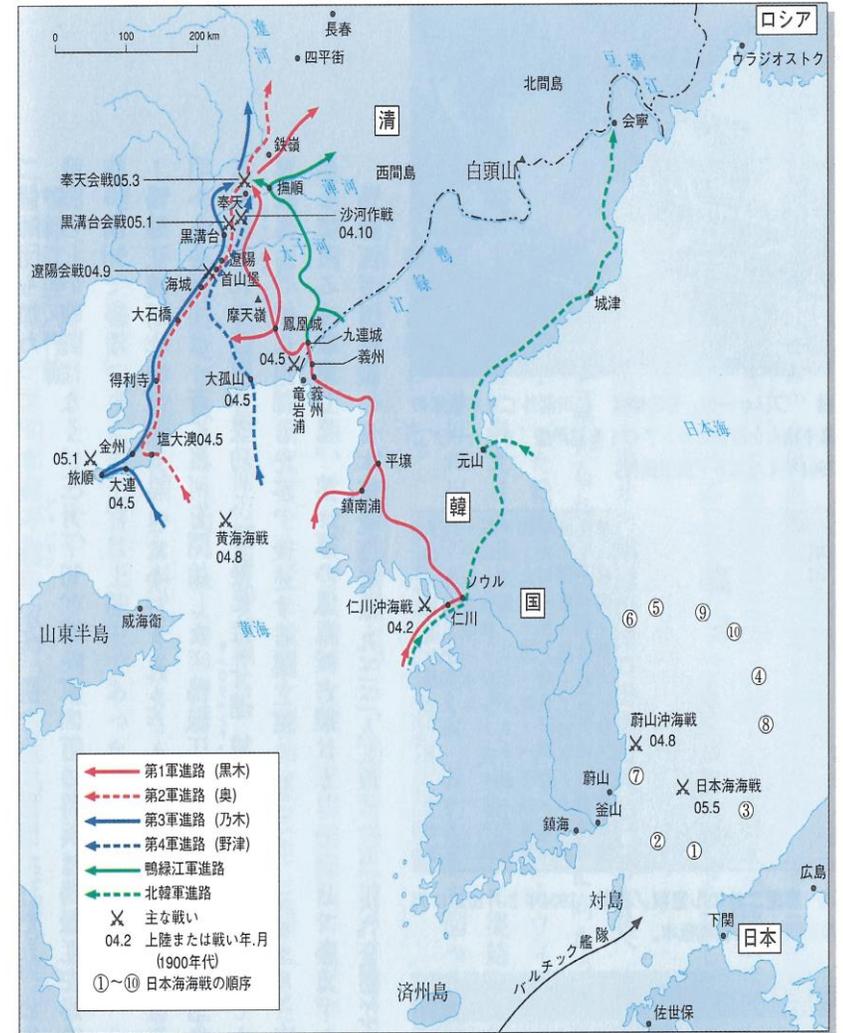
→ロシア外相、その意味を理解できず。



ワリャーグ号の惨状
1904年2月8日仁川港に停泊
中のロシア巡洋艦ワリャーグ
号は日本軍の奇襲攻撃を受け、
降伏を嫌い、港外で自沈した。

参謀本部の作戦計画

- ①シベリア鉄道が全面開通以前、輸送が進まず、ロシア軍の兵力不足のうちに、
 - ②可能な限りの大軍を満州南部に送り込み、
 - ③できる限り早く決戦にもちこみ、
 - ④圧倒的な勝利を得て、
 - ⑤外交ルートで早期講和を実現。
- 前提として
- ⑥海軍による兵員・物資の輸送ルート、海上権の確保



緒戦の経過

① **第一軍**…朝鮮半島に上陸

⇒半島を縦断 5/1鴨緑江渡河⇒満州へ

② **第二軍**

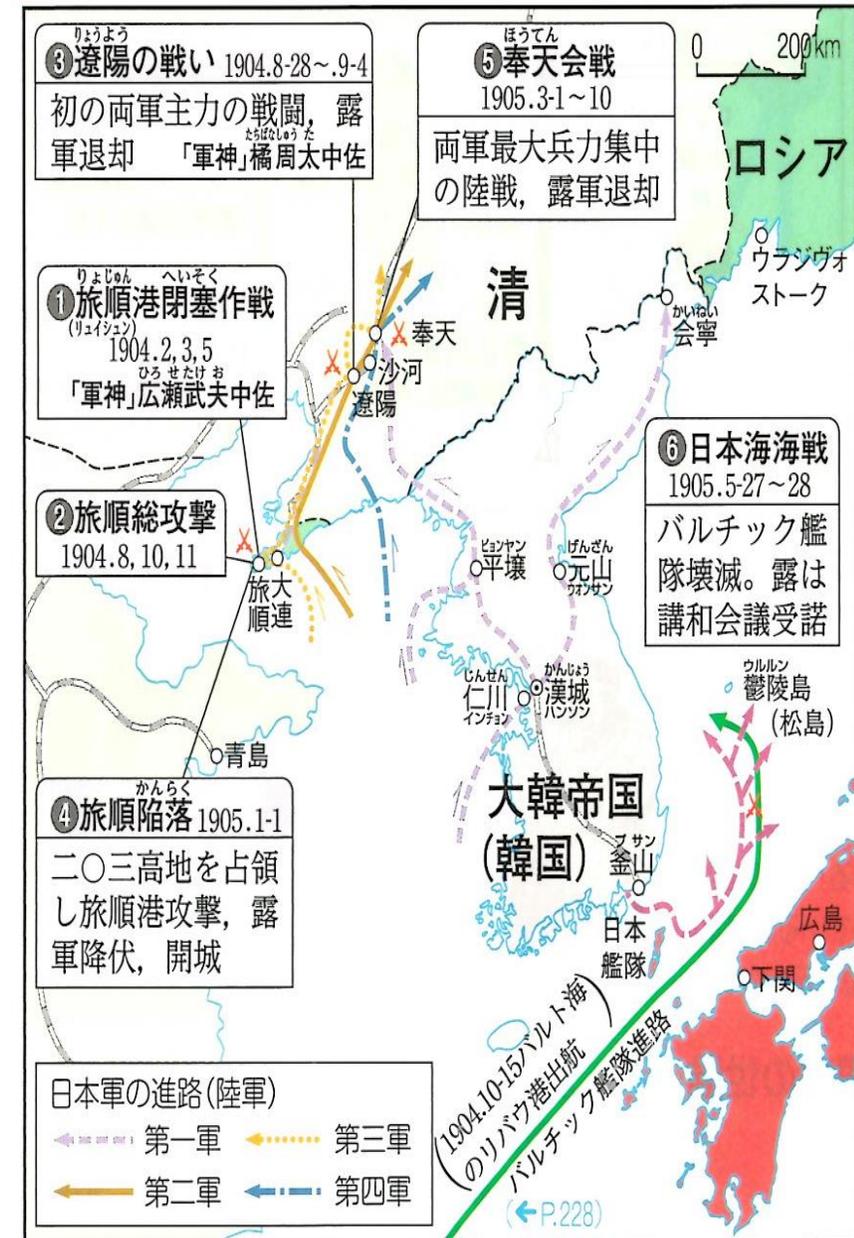
5/5 遼東半島南岸に上陸⇒旅順への
補給路を切断⇒南満州平原進出

③ **第三軍** 旅順攻略作戦に投入

5/27 第二軍二個師団などから編成

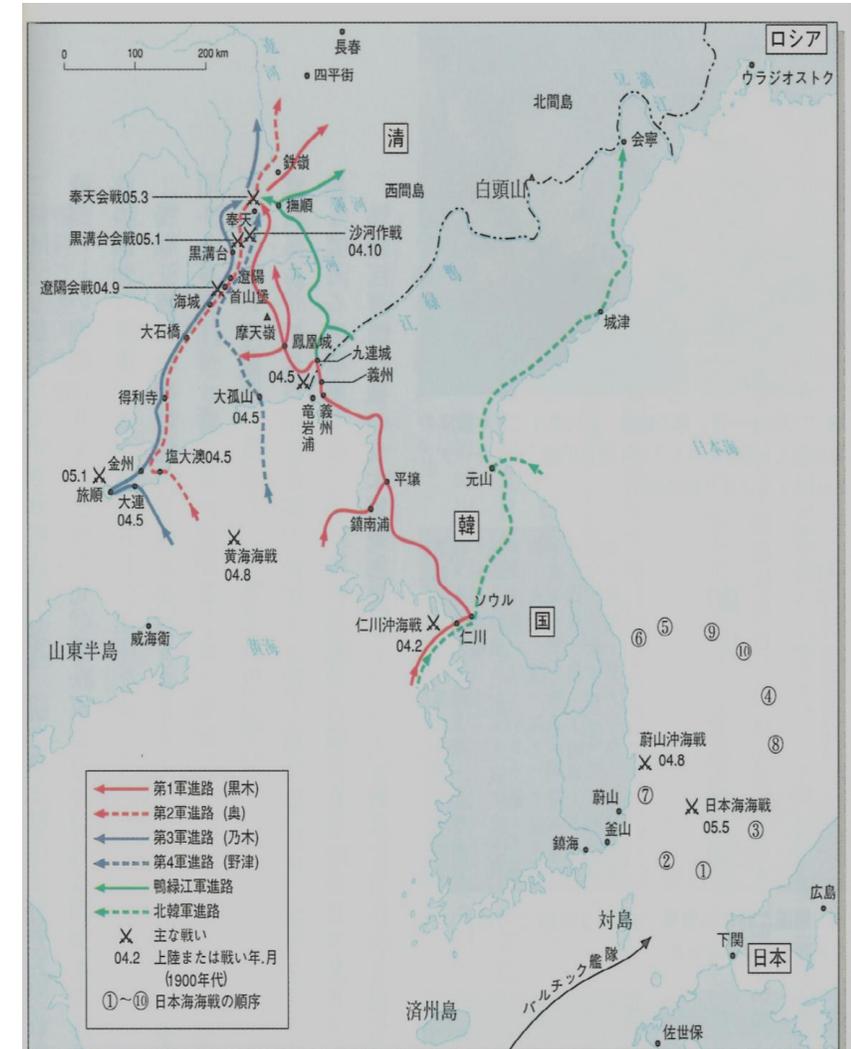
④ **第四軍**

6/30編成⇒南満州平原に



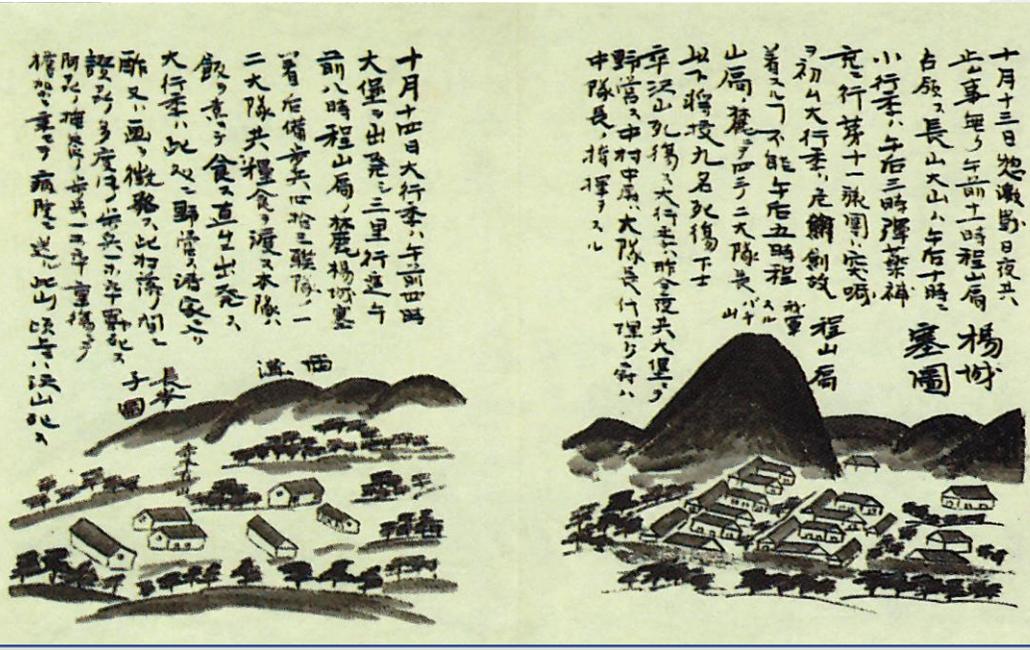
作戦計画との齟齬～大軍との戦いに

- ① 旅順攻略戦の実施により二方面作戦に
= 決戦地・南満州平原の量的優位は失われる
- ② 膨大な弾薬消費 = 弾薬不足による作戦遅延
⇒ 「火力主義」と機動戦は不可能に
- ③ 旅順要塞の強固な防衛力への軽視
= 膨大な犠牲、武器弾薬などの大量の消耗
早期決戦、圧勝、早期講和のシナリオ崩壊
- ④ シベリア鉄道バイカル湖迂回線 9月開通
= 輸送はしだいに改善、ロシアの量的優位に
⇒ ロシア軍充実、物量・兵力での劣位拡大へ



IV、苛酷な戦場

～旅順・南満州平原・対馬沖～



戦場から送られた便り

なぜ旅順か？

～ロシア・ウラジオ艦隊の奮戦～

- 2/11 津軽海峡で商船・奈古浦丸を撃沈
- 4/25 元山で輸送船金州丸撃沈⇒兵員が捕虜に
- 6/15 玄界灘で常陸丸(6175トン)を撃沈
⇒1063人の兵士・乗員が死亡
- 7/20 太平洋作戦＝伊豆半島沖まで到達
⇒7隻を沈め2隻を拿捕、3隻を臨検

日本海6回太平洋1回の出撃

⇒日本の海上輸送を大混乱に陥れる

⇒8/14 蔚山沖海戦、ウラジオ艦隊壊滅

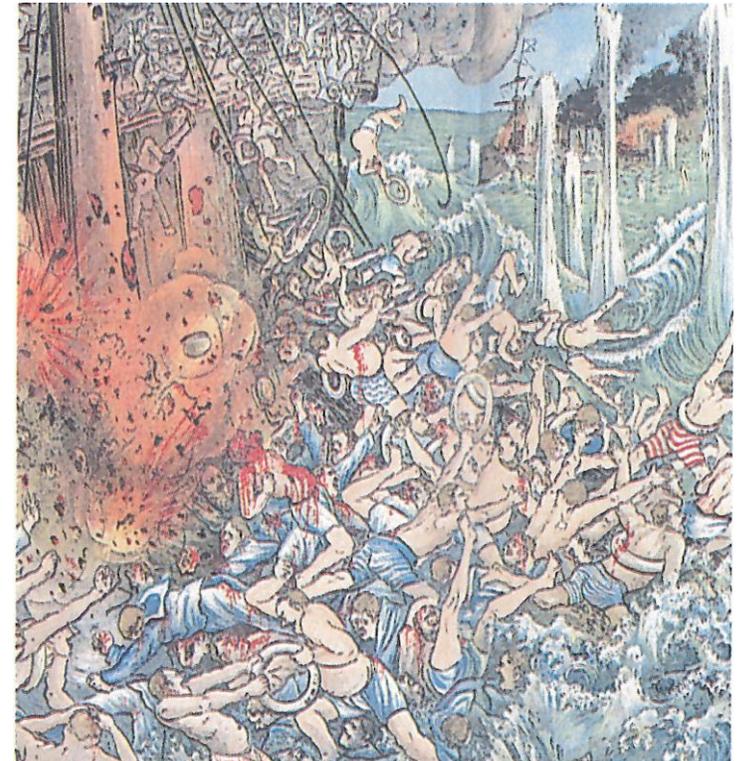


撃沈された「奈古浦丸」をロシア兵に陵辱される女性に見立てた当時の挿画

「日本のアキレス腱」としての海上権 ～ 3隻のロシア巡洋艦隊の奮戦が示すもの～

ウラジオ艦隊による海上攪乱作戦

- ① 兵員や武器弾薬等の輸送困難に
 - ・ 兵士は海没死し、戦地での物資不足に
- ② 海上封鎖の危機
 - ・ 貿易が途絶による産業・生活への影響
 - ・ 購入した兵器や原材料が届かなくなる。
- ③ 列島への直接攻撃の危機
 - ・ 艦砲射撃、上陸作戦などの危険性
 - ・ 国内での戦闘⇒北海道や離島占領も



巡洋艦リュークの撃沈
日本側を苦しめたウラジオ艦隊は、04年8月の蔚山沖海戦で日本海軍に捕捉され、壊滅した

海軍の役割～絶対条件としての海上権

- ① 列島の安全と輸送ルート確保
- ② 二方面のロシア艦隊とのたたかい
 - ・ 旅順の太平洋艦隊+ウラジオ艦隊
 - ・ 本国からくるバルチック艦隊



- ① ウラジオ艦隊に対する警戒
 - ② 本国艦隊到着以前の旅順艦隊の無力化（⇒旅順作戦の要請に）
 - ③ 艦船整備と本国艦隊との決戦
- ※艦船の消耗を最小限にすること

戦艦名	竣工年	トン数	隻数	艦種	隻数	戦艦名	竣工年	トン数
ペトロパウロフスク	1899	11,354	7	戦艦	6	三笠	1902	15,362
ツェザレウィチ	1903	12,915	4	装甲巡洋艦	7	朝日	1900	14,765
レトウィザン	1901	12,900	10	巡洋艦	12	初瀬	1901	15,000
ペレスウェート	1901	12,263	18	駆逐艦	19	敷島	1900	14,850
ポビエダ	1902	12,683	17	水雷艇	28	富士	1897	12,649
ポルタワ	1898	10,960	7	砲艦	7	八島	1897	12,517
セバストポリ	1899	11,842	0	仮装巡洋艦	18			
			0	海防艦	6			
			0	通報艦	3			

ロシア太平洋艦隊

日本艦隊

*ロシアの砲艦は水雷砲艦を含む。
全艦艇の総排水量 191,000トン

全艦艇の総排水量 233,200トン

ロシアは最新鋭艦を太平洋艦隊(旅順艦隊)にあつめており、日露両艦隊を比較した場合、日本側にやや分がある程度であった。

陸軍、旅順要塞攻撃へ

①海軍の旅順港閉塞作戦失敗

3回（2月3月5月）実施⇒いずれも失敗

②8月出撃した旅順艦隊の捕捉・撃滅に失敗 （黄海海戦）

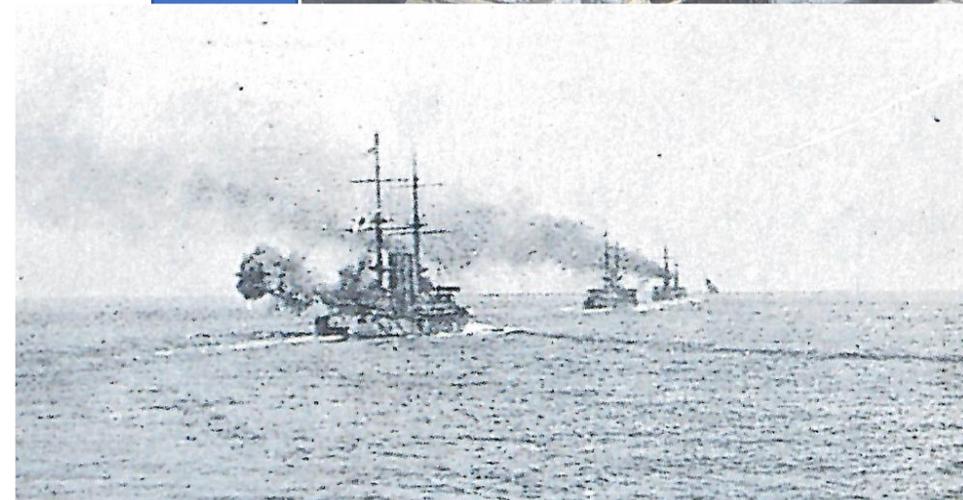
③旅順艦隊…旅順港内にこもり、 バルチック艦隊を待つ作戦？に



陸軍による、陸上からの攻撃により

旅順艦隊追い出す、ないし壊滅を期待

旅順港閉塞作戦失敗
～ 広瀬中佐の戦死



黄海海戦…8月旅順艦隊は出港、ウラジオ
港に向かったが、日本海軍に阻まれ、司令
官を失うなどの被害を受け、旅順港に帰還
した。

旅順要塞攻略戦（8月～1月）

第三軍乃木希典司令官（第1・第9・第11のうち第7師団も）

①第一回（8月）＝作戦上の要望から**準備不足**のまま攻撃⇒正面突破をめざすが堅塁に阻まれる

②第二回（10月）＝**国内世論**に押され実施。

従来戦術＝**歩兵による突撃「肉弾戦」**に固執。失敗

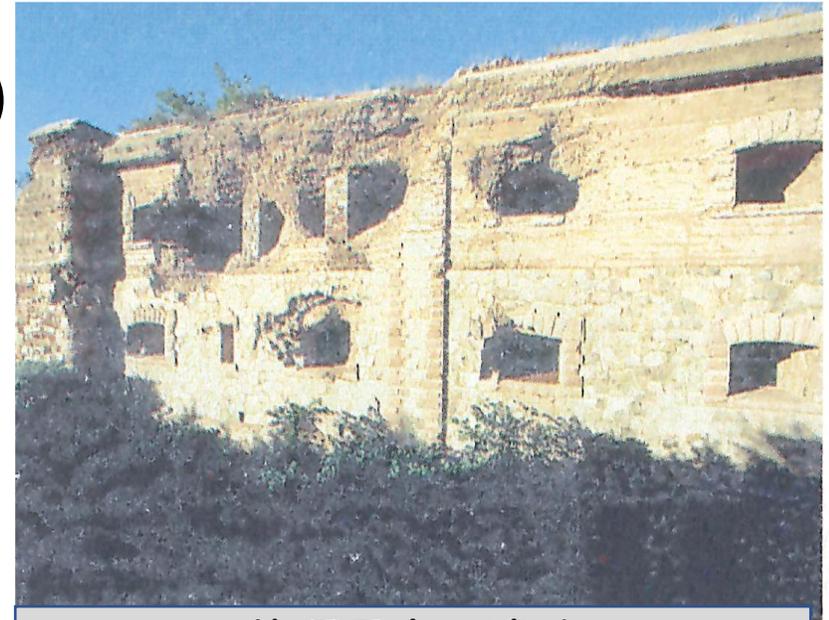
③第三回（11～12月）＝**203高地へ兵力集中し占領**
⇒**砲撃を誘導し、旅順艦隊を壊滅させる**

④**1月ロシア軍降伏＝「水師営の会見」**

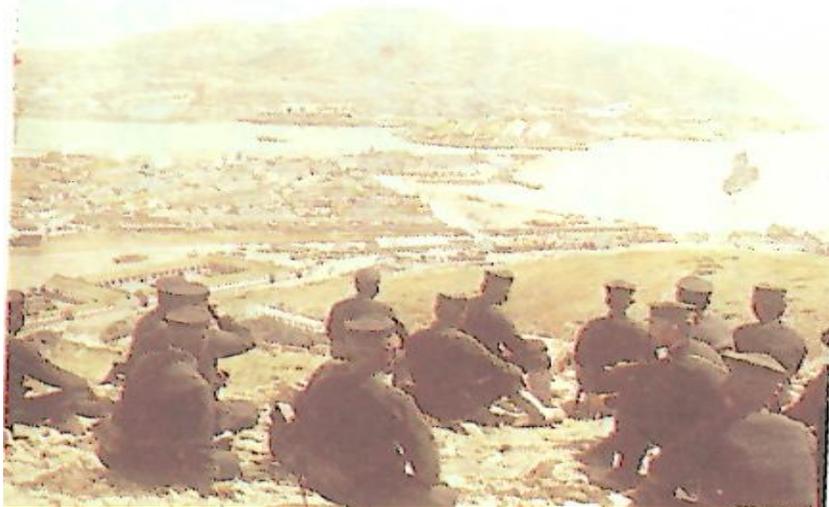
⑤**膨大な被害＝大量の兵士と軍需物資など**

日本：死者15390人 負傷：43914人 疫病患者：約3万人

ロシアも同様か



旅順要塞の遺跡



二〇三高地から撃沈される艦隊をみる兵士たち

南満州平原における激闘～遼陽会戦～奉天会戦

04年8月～翌年3月の奉天会戦まで南満州平原で双方の大軍が対峙・戦闘

①04, 8遼陽会戦 機動力と局地的兵力集中で陣地突破⇒遼陽を確保

日本134,500⇒死傷23,533 露224,600⇒死傷約2万

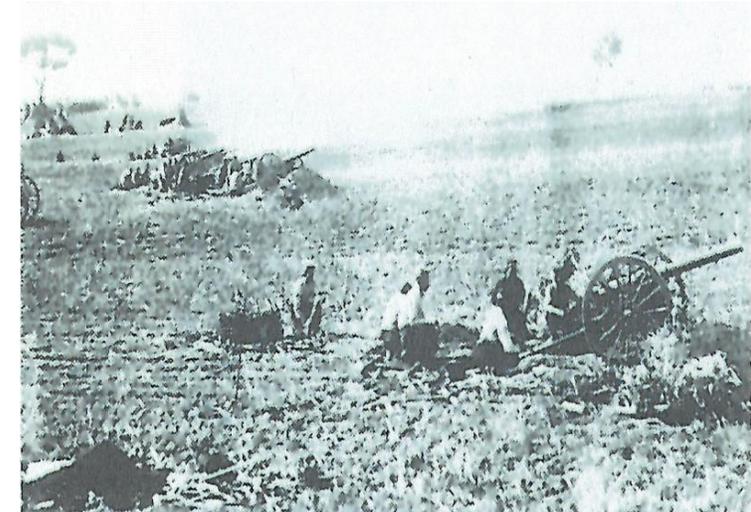
②04, 10沙河の戦い ロシア軍の南下を押し返す。

日本120,800⇒死傷20,497 露221,600⇒死傷不明41,346

③05, 1黒溝台の戦い 厳冬期のロシア軍の奇襲

日本53,800⇒死傷9,316 露105,100⇒死傷不明11,732

④05, 3奉天大会戦 軍備・兵力に劣る日本軍によるロシア軍包囲作戦



沙河の戦い(04年10月)



ロシア兵を埋葬する日本兵

奉天会戦（1905年3月1日～10日）

- ① **日本:249,800人・ロシア:約32万人**
日本側：常設全13個後備1個師団・後備11個旅団投入
- ② 3月1日 日本軍の先制攻撃⇒**一進一退**
- ③ 9日 **ロシア司令官、全軍に撤退を命令**
- ④ 10日 **奉天占領**⇒追撃・撃滅は不可能
- ⑤ **死傷者…日本：70,024人 露：89,423人**
= **損耗率は両軍とも28%**（日本の「惨勝」）
- ⑥ 日本軍：予備兵力払底、多数の将校の損害
⇒ **部隊の戦闘能力は著しく低下**
⇒ 前線からの講和を求める声のたかまり
- ⑦ **ロシア：兵力温存、兵員補充補給改善**



奉天から撤退するロシア兵



奉天入城

日本軍の優位を支えたもの

1) ナショナリズム＝兵士の意識(戦意)の高さ

「自分の国・自国の軍隊」との意識

2) 新興国の軍隊＝実力主義と最新の軍事技術

① 将兵（とくに将校）の質と練度の高さ

② 最新の軍事技術の導入

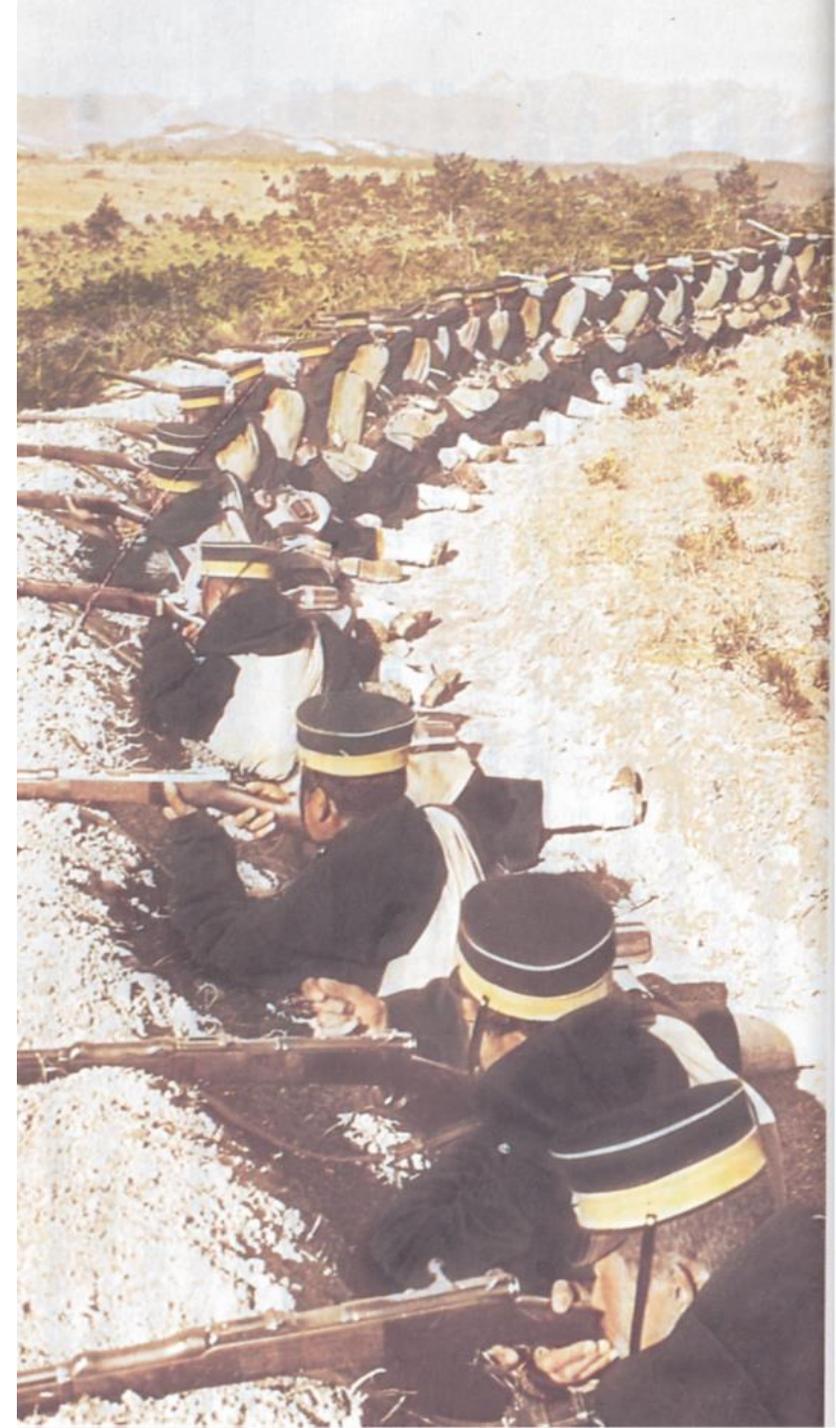
- ・ 最新鋭の兵器、「火力主義」と機動戦
- ・ 電信・電話を利用した共同作戦と連携

⇒ 激戦の連続・膨大な損害の発生

① 兵器・弾薬の不足、兵員の「消耗」

② 将兵の質と練度の低下

とくに中・小隊長クラス戦死・兵力不足



ロシアの敗因 = ロシアの国内矛盾を反映

- ①有能な将校・兵士とそれ以外のばらつきが大きい
質(練度)より量を頼りにする。
- ②部隊同士、司令官同士の**連携の弱さ**
- ③貴族・官僚からなる将校
=実力より家柄重視、皇帝との関係で左右された。
- ④司令部の問題 = **クロパトキン総司令官の資質**
 - 1) 年来の主張…南満州 = 旅順大連撤退、北満州堅持
 - 2) 国家的成功体験…奥地に引き込み厳冬を利用し
反撃
 - 3) 戦略的撤退をくりかえす = 客観的には敗北
⇒士気の低下、国内の反発、国債販売の不振



クロパトキン

(1848~1925)

元陸相・日露戦争における
ロシア満州軍総司令官

なぜロシアは敗れたのか？

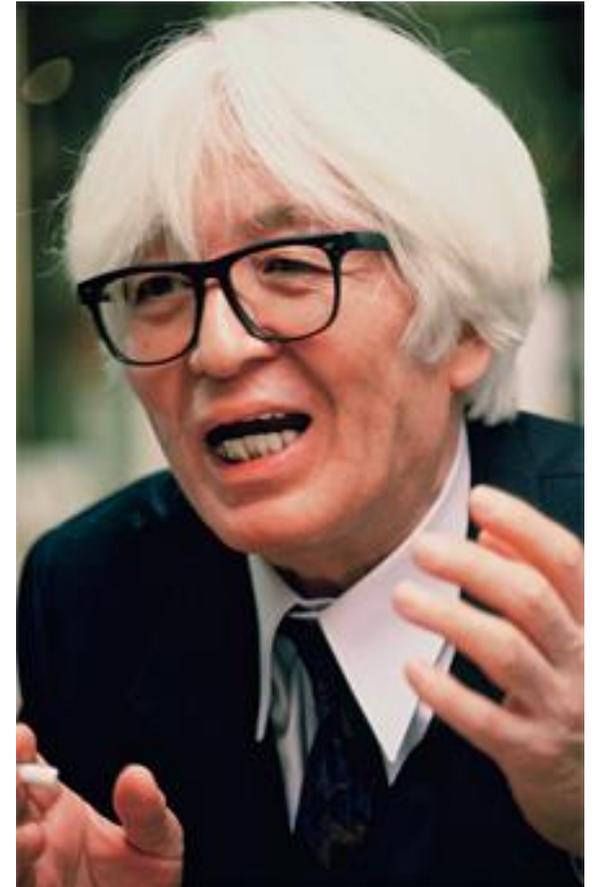
「自ら膝をくずし土をつけた」 (司馬遼太郎)

極端に言えば、**四つに組んでわれとわが身で膝をくずして土をつけた**ようなところがある。

満州における諸会戦のあとを見ても、その敗因は**日本軍の強さというよりもロシア軍の指揮系統の混乱とか高級指揮官同士の相剋とか、そのようなことがむしろ敗北をみずからまねくようなことになっている。**

ロシア皇帝をふくめた本国と満州における戦争指導者層自身が、日本軍よりもまずみずからに負けたところがきわめて大きい。

(司馬遼太郎「坂の上の雲」あとがきより)



司馬遼太郎 (1923~96) 日露戦争を取材した「坂の上の雲」はベストセラーとなった。

バルチック艦隊～悲しき大航海

ロシア、ヨーロッパ艦隊などで編成

①04年10月出航

②半年をかけ、33,340キロを航海

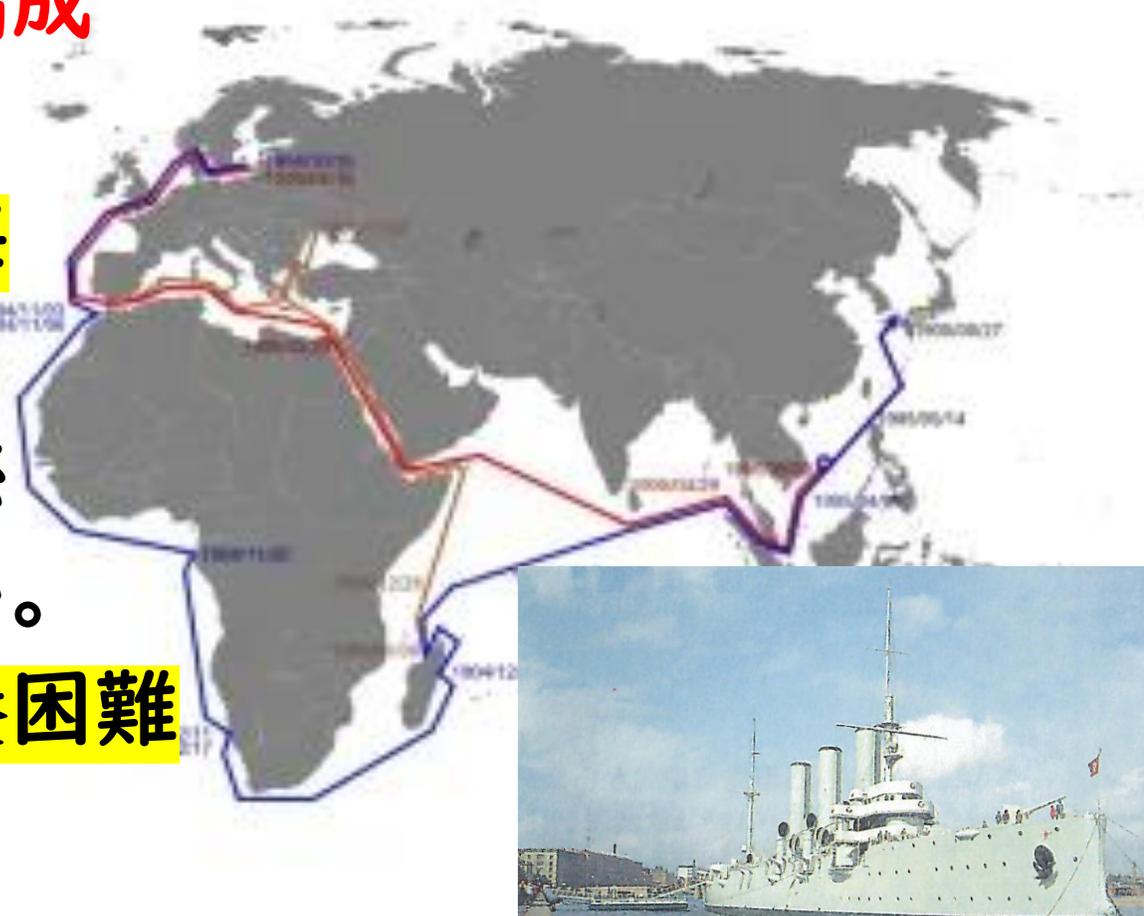
③イギリスの執拗な妨害

④同盟国フランスの非友好的対応

⑤寄港・修繕地をみつけられない。

⇒疫病の発生・補給・修繕・休養困難

⑥将校と兵士の対立



バルチック艦隊の生残り＝
オーロラ号

日本海海戦('05年5月27日)

①バルチック艦隊

半年・33,340キロの航海

整備・疲労回復できずアジアへ

石炭の洋上積み込み⇒過重量・速度低下

②日本、12月以降、整備・訓練の充実

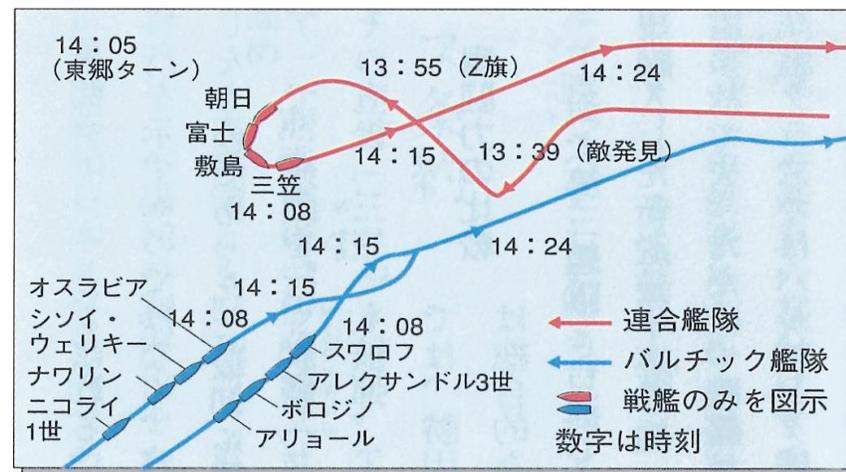
③5/27~28 日本海海戦

海戦史上まれなワンサイドゲーム

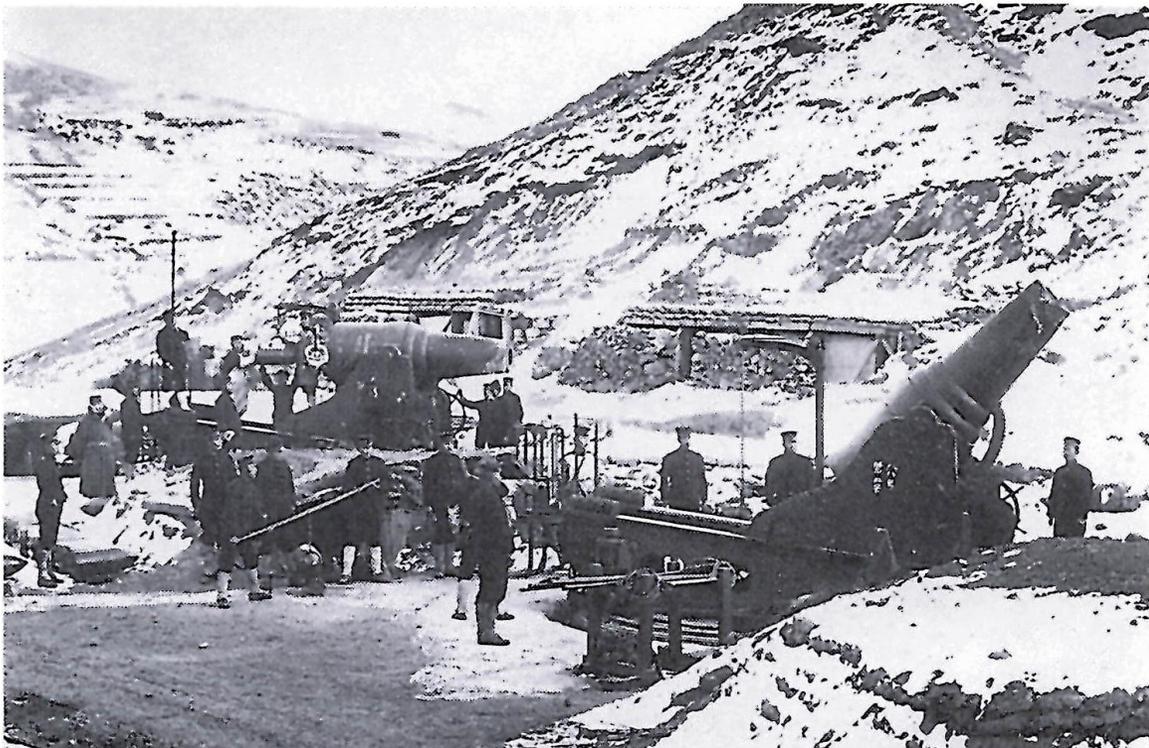
⇒日本側の完勝・バルチック艦隊壊滅

隻数	艦種	隻数
8	戦艦	4
9	巡洋艦	20 (装甲巡洋艦を含む)
9	駆逐艦	21
3	海防艇	5 (装甲海防艇を含む)
0	水雷艇	42

門数	火砲	門数
33	主砲30センチ	17
25	主砲20センチ	34
106	副砲15センチ	202

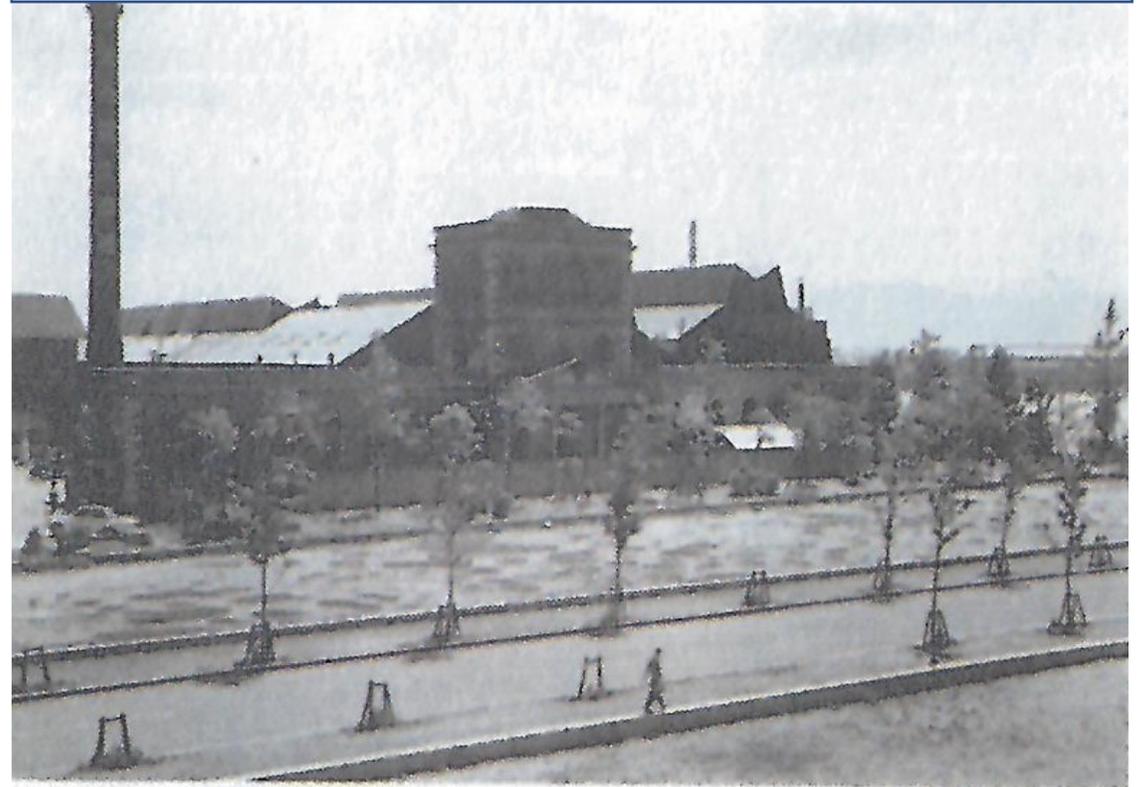


V、世界初の近代戦・総力戦



旅順攻防戦の死命を決した28センチ榴弾砲

東京砲兵工廠・苛酷な労働で労災が頻発した



史上初の近代戦＝ハイテク戦争

①近代国家同士の本格的な戦争

1870～71年の普仏戦争以来、30数年ぶり

②第二次産業革命＝重化学工業化を反映

世界最新鋭の兵器や軍事技術を使用

機銃、下瀬火薬・伊集院信管
巨大な大砲の使用

⇒桁違いな量の砲銃弾使用へ

③情報機器の使用＝電信・電話



機銃は大量の死傷者を生み出した。



旅順攻略戦で大きな効果を上げた
28センチ榴弾砲

「総力戦」としての日露戦争

「総力戦」…兵員と兵器の供給能力
(「銃後」)が死命を制する戦争に

①行政機構の整備

…徴兵と徴税を支える地方制度の整備

②国内・韓国での鉄道などの整備

⇒韓国民衆を動員しての京釜鉄道などの敷設

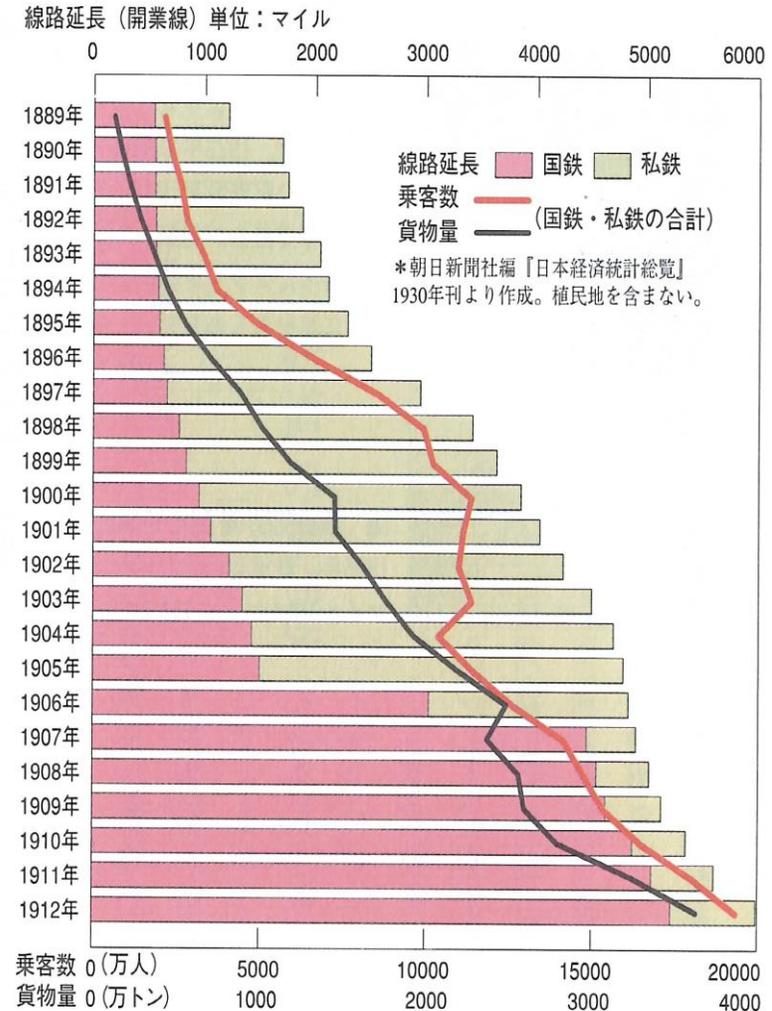
③フル操業の軍需産業

…過労死と労災が続出する軍工廠

④資金調達能力が勝敗を決する

…増税・内国債・不足分は借款に

⑤国民の動員 = マスコミ、ナショナルリズム



鉄道輸送の急速な発展が、戦争遂行の大きな力となった。

膨大な戦費調達＝総額約18億円

① 税負担の増加＝合計約5億円調達

- 1) 戦争準備期＝「臥薪嘗胆」
- 2) 非常特別税＝1.4億円
- 3) 一般会計からの繰り入れなど
⇒ 税収の負担は約2倍に

② 内国債＝約6億円

事実上、国民に強制

③ 外債＝約7億円

⇒ 英・米の銀行家が応じる

戦費の調達

(単位：万円)

臨時軍事費の財源(予算)内訳	
内債・外債	13億1354
一時借入金	1億7888
一般会計繰替 (非常特別税を含む)	1億8900
特別会計資金繰入	6300
軍資献納金	150
雑収入	50
合計	17億4642

間接税中心の増税

① 増税⇒税収の負担は約2倍に

1) 間接税 (塩・タバコ・各種消費税など)

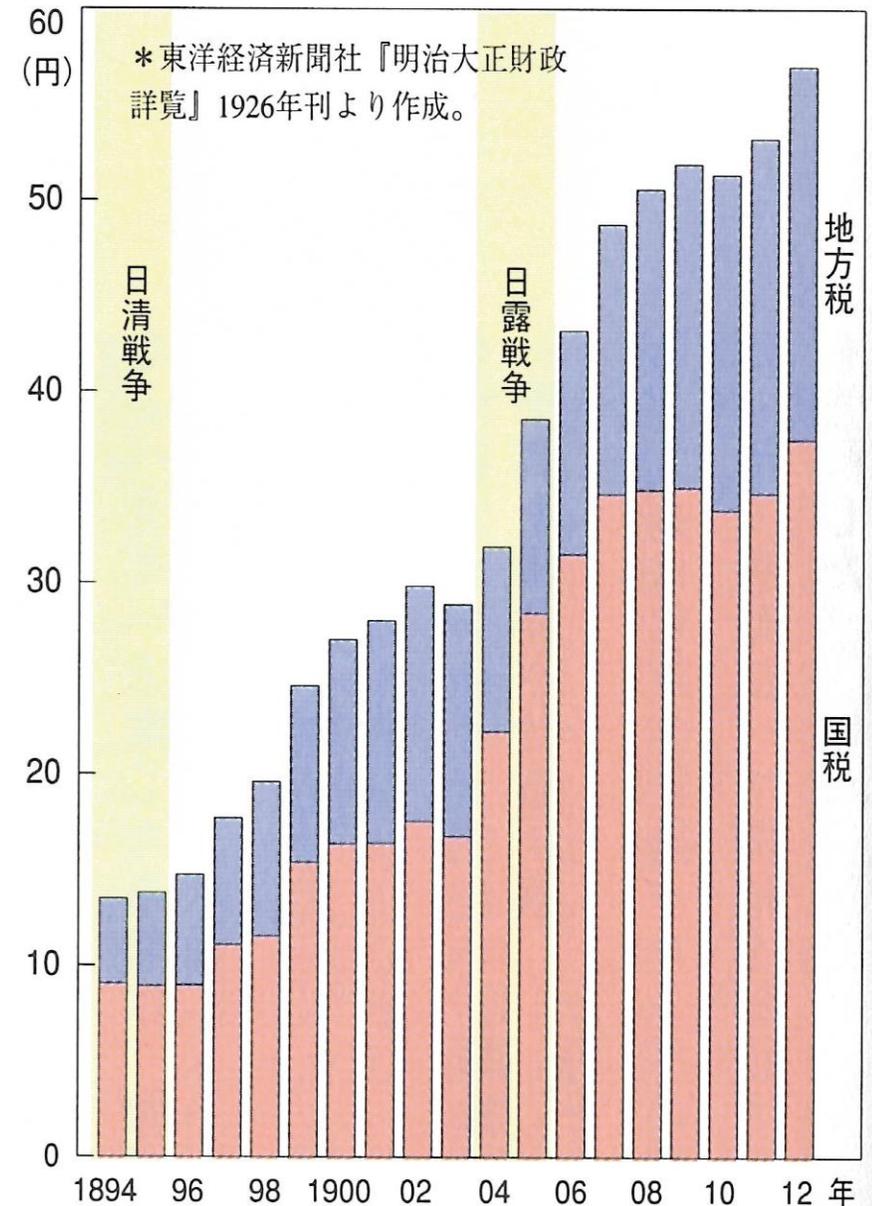
逆進性の強い税 = 貧困層に重い

⇒ 帝国議会… 間接税の割合を増加させる

2) 国税の増加 = 地方税の歳入減をもたらす。

教育費や道路整備費など生活関連費用の減少へつながる。

※ 直接税 (とくに地租) 増税が結果として選挙権拡大につながる面も。



内国債＝約6億円

②内国債＝約6億円

1) 必要額を各地方に割り振る

⇒ 地方行政によって各町内へ

⇒ 一戸一戸にわりふる

⇒ 戸別訪問で各戸に「勧誘」を
ノルマ・競争・「その筋」の協力

③ その他、さまざまな名目での
寄付や協力要請

⇒ 戦死者や出征者家族への義捐金
・ 祝賀会・葬儀費用などを賄う。



165 戦時国庫債券 日露戦争の費用をまかなった
内外債のうち内国債券は、1904～05年に5回発行
され、全国的な募債運動が展開された。

外国債発行とユダヤ系金融

① 戦時国債7億円を主に英・米で調達

健全財政の方針放棄＝現在に至る「借金財政」へ

② 高橋是清らの奔走

「勝利は困難」の世評から募集困難に

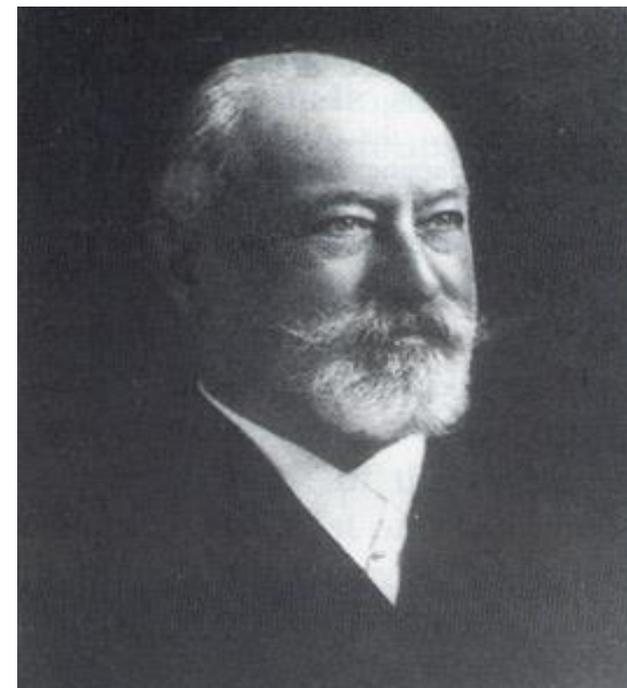
⇒ **イメージ戦略**の展開＝優勢な戦況、日本文化

③ ユダヤ系金融ネットワークの協力

1) ロシアでの「ポグロム（大量虐殺）」への怒り

⇒ 敗戦をきっかけとするロシアの変革への期待

2) **アメリカ鉄道資本などの利害も反映**



ジェイコブ＝シフ
(1847～1920)

アメリカのユダヤ系金融業者。高橋是清の求めに応じ、2億ドルという多額の融資に応じるとともにユダヤ系銀行などにも働きかた。満州進出をめざす鉄道王ハリマンにも出資していた。

日本の「イメージ戦略」

キリスト教vs非キリスト教
白人vs黄色人種

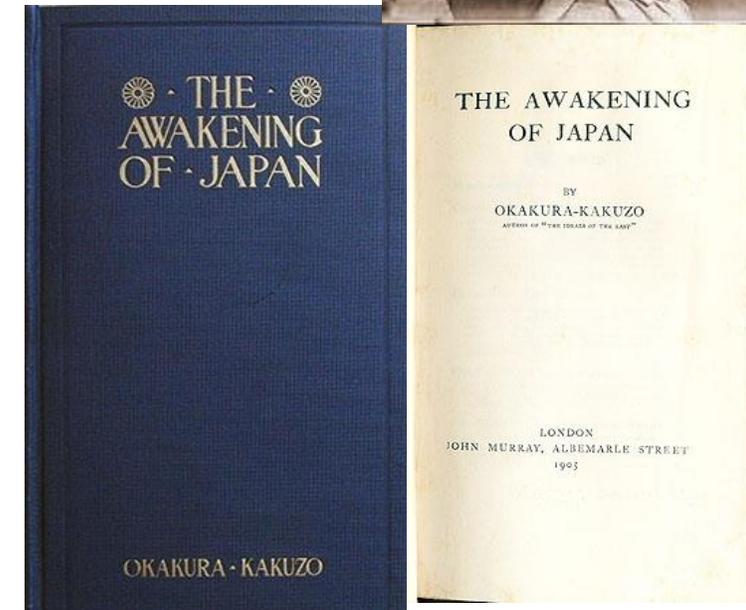


専制・野蛮vs文明・正義と人道

議会・憲法などを強調

岡倉天心『東洋の覚醒』・「武士道」

- ①親日世論の創出による国債消化を実現
⇒満州支配への先行投資の期待も
- ②ロシアの戦時国債の消化困難に
⇒フランスさえ引き受け拒否へ



1904年に発売された岡倉天心の「東洋の覚醒」は日本に対する印象を大きく塗り替えることに成功した

「文明国」の開かれた戦争？

①大量の外国人記者の来日

②戦場報道をめぐる対立

隠そうとする軍部と、知りたい外国記者

③従軍を許可…「日本優勢」の記事を発信

欧米の世論を大きく変える。

④英米メディア…親日的な空気を創出

⇒戦時国債の応募拡大・ロシア国債の不調

⑤海外メディアの「目」

= 「文明国」を演じざるを得ない。

捕虜への対応などへの配慮

非戦論への対応も



乃木希典

乃木の古武士的な風貌が
アメリカ人記者を魅了し
た

VI、ポーツマス条約と国民



ロシア第一革命の発生

①ロシアでの国内矛盾の高まり

国民の不満と、政府さらには皇帝への怨嗟

⇒帝政への公然とした批判へと発展

- ・ 憲法制定や国会開設要求
- ・ テロの発生＝内務大臣暗殺など

②05年1月 血の日曜日事件

⇒ロシア第一革命へと発展

- ・ ストライキ参加者44万人
- ・ 労働者・兵士によるソヴィエト結成
- ・ 水兵の暴動発生

③ロシア…戦争継続、困難に



血の日曜日事件（1905年1月）
ロシア首都で行われた労働者の平和的な請願デモを軍が射撃、多数の死傷者を出した。これをきっかけに皇帝に対する反発が一挙に表面化した。

講和への動き

- ①開戦直前、金子堅太郎をアメリカへ派遣
⇒米大統領との接触を開始
- ②05年3月山県参謀総長「政戦両略概略」を提示
⇒陸軍の新たな勝利は望めない
⇒講和の方向を期待
- ③5/31米大統領への講和斡旋依頼を訓令
- ④6/9米大統領、日露両国に講和勧告文を手交
⇒6/10日本承諾、6/12ロシア承諾
- ⑤7/4日本軍、樺太占領へ
- ⑥/8/10ポーツマス講和会議開催
⇒8/29妥協成立,9/5講和条約調印



日本軍のサハリン(樺太) 上陸

日露講和を望む列強

①アメリカ…満州を独占するロシアを嫌い、南満州の開放を公約する日本を応援

⇒日本の大勝＝東アジア最大の軍事強国になることへの危機感

②フランス…イギリスとの英仏協商を実現、関係を改善。

⇒同盟国ロシアの弱体化を望まない

③イギリス…日本の大勝による東アジアにおけるバランスの崩れを警戒

⇒日露間の講和
＝東アジアの安定を要望



北沢楽天画「日本を觀察する列強」
東京パック05, 5. 10

ポーツマス講和会議(1)

① T.ローズヴェルト米大統領の仲介
← 背景に英・仏など列強の利害も

② 両国の全権

日本：小村寿太郎、ロシア：ヴィツテ

③ 日本の姿勢 = 戦争終結が最優先

1) 絶対条件 韓国の指導監督権

旅順・大連の租借権引き渡し

南満州鉄道南部の敷設権

2) 希望条件 領土割譲(樺太全島)

賠償金獲得

沿海州沿岸の漁業権



左からヴィツテ、ローゼン駐米大使、T.ローズヴェルト米大統領、小村、高平駐米大使

ポーツマス講和会議(2)

④交渉過程

- 1) 絶対条件(韓国・租借地・鉄道)早期合意
- 2) 希望条件(賠償金・領土)をめぐり激しく対立
ロシア…敗北の意味あい⇒拒否の姿勢
- 3) 日本政府は妥協を指示するが
⇒南樺太の割譲で合意、賠償金は獲得できず

⑤ポーツマス条約の内容

- 1) 韓国の指導監督権承認
- 2) 旅順・大連の租借権引き渡し
- 3) 長春以南の南満州鉄道
- 4) 北緯50度以南の樺太割譲
- 5) 沿海州沿岸の漁業権承認



ポーツマス条約の調印
(白滝幾之助画)

ポーツマス条約と韓国・清国

ロシア…**韓国と清国の立場を主張**

1) ロシア「**韓国皇帝の主権を侵害すべからざる旨**」の一文をいれる

→ 日本が削除「**韓国はもはや完全な独立国ではない**」と拒否

2) ロシア…清の同意がなければ権利を譲渡できない

→ 日本側…**承認を得る手続きは日本が行う。**
ロシアも協力せよ

⇒ 「満州に関する日清交渉会議」で**清に強引に受諾させる。**

= **旅順大連の租借期間は1924年まで**



ヴィツテ (1849~1915)
ロシアの政治家
大蔵大臣としてシベリア鉄道
開通などに大きな力を発揮した。
日露戦争直前失脚したが、
のポーツマス講和会議にロシア
全権として出席した。

日比谷焼き打ち事件(1905・9月)

①政府系をのぞく**新聞各紙**

⇒**講和条約を厳しく非難**

②9月5日、東京・日比谷公会堂で
「講和反対国民大会」を開催

③警察の規制をきっかけに
群衆が暴徒化

⇒警察署や派出所・交番、国民新聞、
内務大臣宅、キリスト教会や市電な
ども襲撃、焼き打ちに

④**戒厳令の発令、全国化も**

⑤**桂首相と西園寺政友会総裁の密約**

⇒**政局化しない**



9月5日、東京・日比谷公園で野党議員ら
「講和反対国民大会」を企画、これを禁止、
阻止しようと入り口を封鎖した警官隊と参加
者が衝突した。大会は開催された。その後、
参集した群衆が新聞社や警察署、派出所など
を襲撃する。

条約に反対する「国民」の声

いったい、政府は国民を何と思っているのだろう。

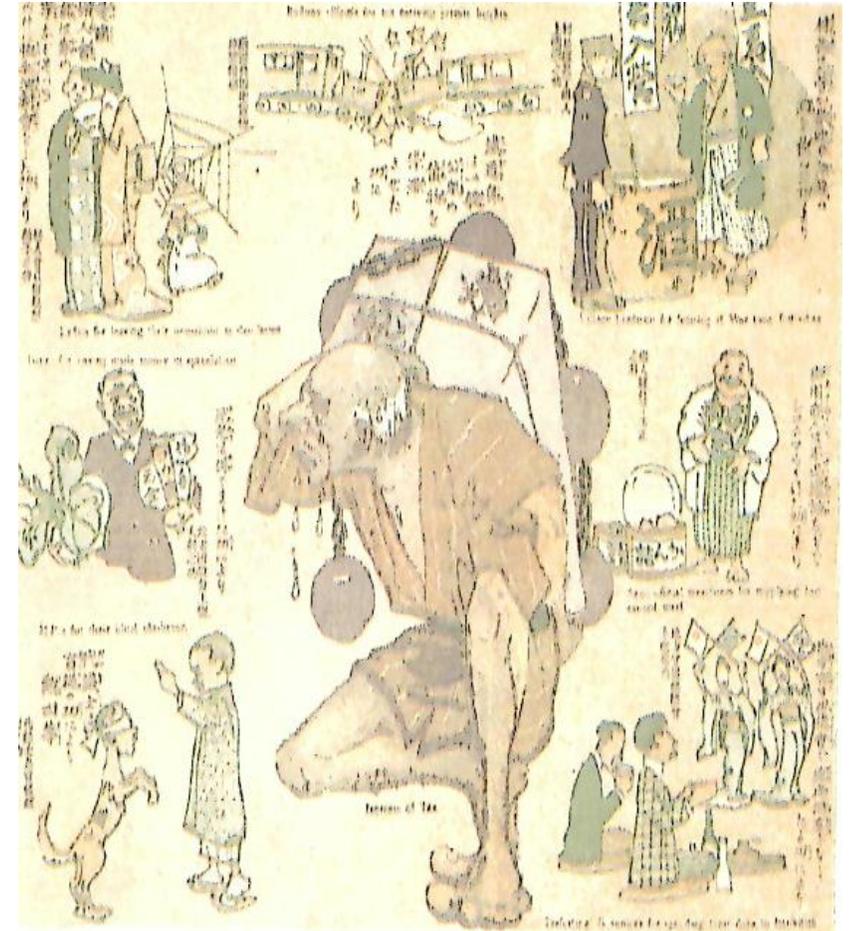
戦費を出させるときは議会だとかなんとか騒いで金を出させて、

戦に勝ったときには乃公（だいこう）のお手柄といわんばかりに自慢してさ。

それはまだしも肝要の講和条件となると独断でやって、

おまけにろくでもない結果を国民に負担させる。

戦費と兵卒は誰が出したんだ。



北沢楽天「増税にあえぐ庶民」
1908年5月20日「東京パック」

「戦争での死」をどう位置づけるか？

戦死者の取り扱いには軍部や政府にとっても大問題

⇒その結果

①戦死者は**国家のための名誉ある死**として、**靖国神社の祭神**とされる。天皇も参拝する。

②都道府県には**招魂社**、村々には**忠魂碑**を建立

⇒郷土の英雄として慰霊・顕彰する。

③戦場につれだされる兵士にとっても、こうした施設は、**みずからの死を納得するための装置**となる。



靖国神社資料館（遊就館）

写真や遺品を飾られた人の名前の下には「命（みこと）」の字がつく。戦死した兵士たちはこのように靖国神社に祭られる「神」とされた。

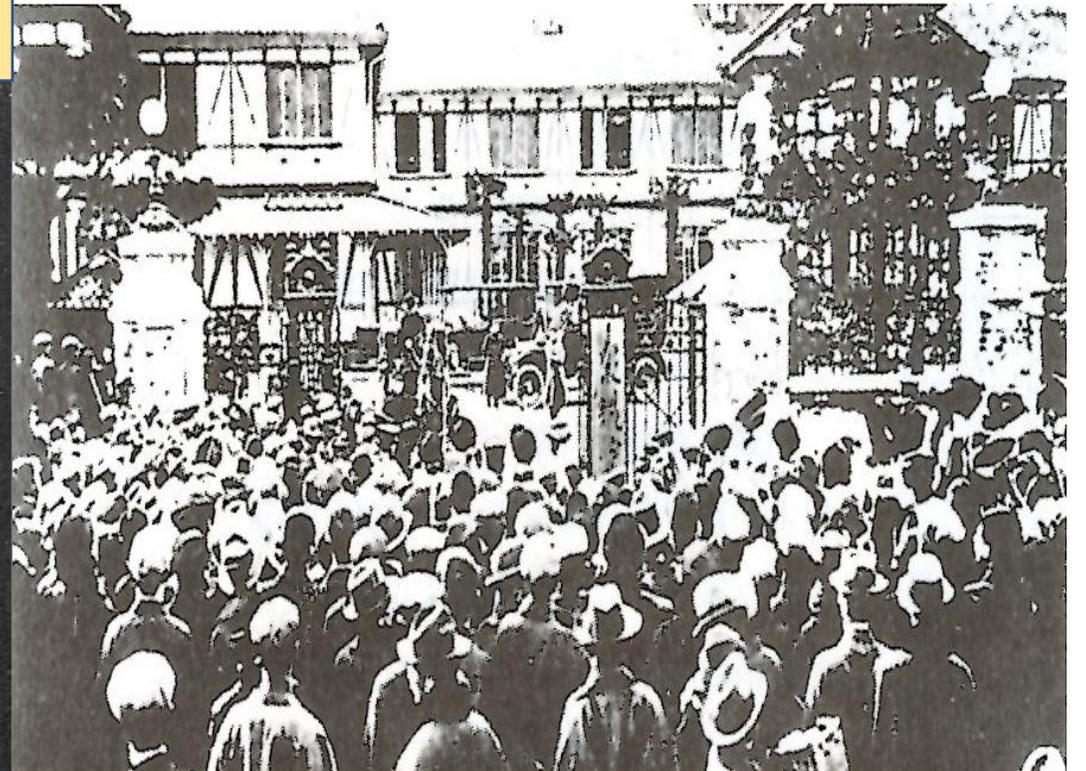
VII、おわりに～「坂の上」の風景

日清・日露が生み出した日本と世界



伊藤博文と韓国皇太子

二〇三高地という髪型



普通選挙を求め集まった人びと

日露戦争の最大の争点としての韓国

韓国の主権・中立を侵害

1904/1/21 韓国、中立を宣言

2/6 韓国・鎮海湾を占領

2/8 日本海軍、仁川などのロシア艦を奇襲

日本軍、仁川上陸→2/9 ソウルを制圧

2/9・10 日露両国宣戦布告＝日露戦争開戦

2/23 日韓議定書

戦争遂行上必要な便宜、土地提供を義務づける
施設改善に関し日本政府の忠告を入れる。

8/22 第一次日韓協約

日本政府が推薦する財務顧問・外交顧問
の招聘、各重要外交案件の協議を承認



軍用鉄道を破壊したとして処刑される金聖三ら

日露戦争の最大の結果 韓国の植民地化

1905年11月 **第二次日韓協約**

ポーツマス条約を受け、朝鮮の外交権を奪い
「保護国」に、韓国統監設置

⇒抗日義兵闘争の再開

⇒1907ハーグ密使事件（1907）

1907年高宗の退位、韓国軍の解散

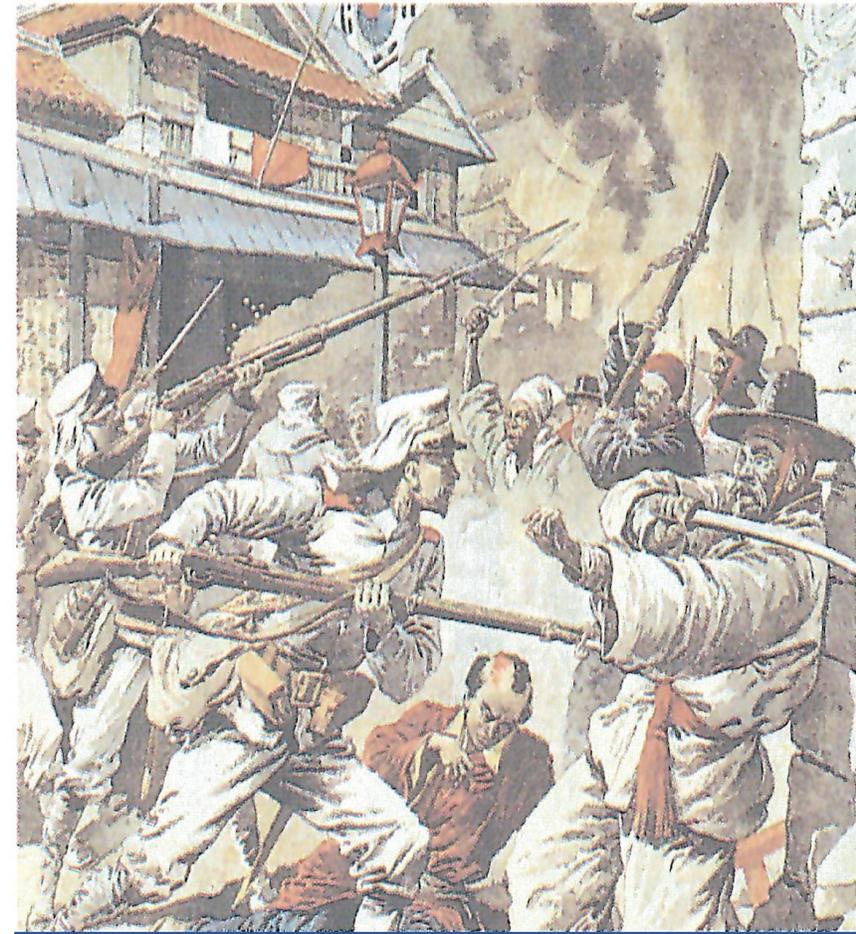
第三次日韓協約 = 韓国の内政権を奪う

⇒抗日義兵闘争の活発化 = 軍隊の合流

⇒1909 伊藤博文、安重根に暗殺される

1910年8月 **韓国併合 = 植民地化**

⇒1919 **三一独立運動** ⇒ 民族運動つづく



強制解散令に反対し、蜂起し義兵運動に加わった韓国軍兵士たち

「坂の上」の風景～中国民族運動との対決

- ① **ポーツマス条約＝南満州における利権獲得**
⇒ 両国の秘密合意も加え、清国に受諾させる
ただし、関東州の租借期限は1923年まで
- ② **中国における民族運動の高まり**
利権回収運動＝関東州の租借延長反対
満鉄並行線建設運動＝アメリカと結ぶ
- ③ **反日運動の高まり＝日本商品ボイコットへ**
(1911辛亥革命＝中華民国成立)
 - ・ 1915「二十一か条要求」強要
⇒ 日貨排斥運動＝「国恥記念日」
 - ・ 1919五四運動、1925五三〇事件



五四運動（1919）
デモ行進をする北京大学生たち。ヴェルサイユ条約に反対する学生の行動は全国的な抗日・反帝運動に発展した。

「坂の上」の風景～アメリカとの対立

① **桂ハリマン協定** = 満鉄の日米共同経営・共同開発案

⇒ 小村外相・陸軍の反対で**破棄**

② 1906帝国国防方針

= 海軍の仮想敵国はアメリカ

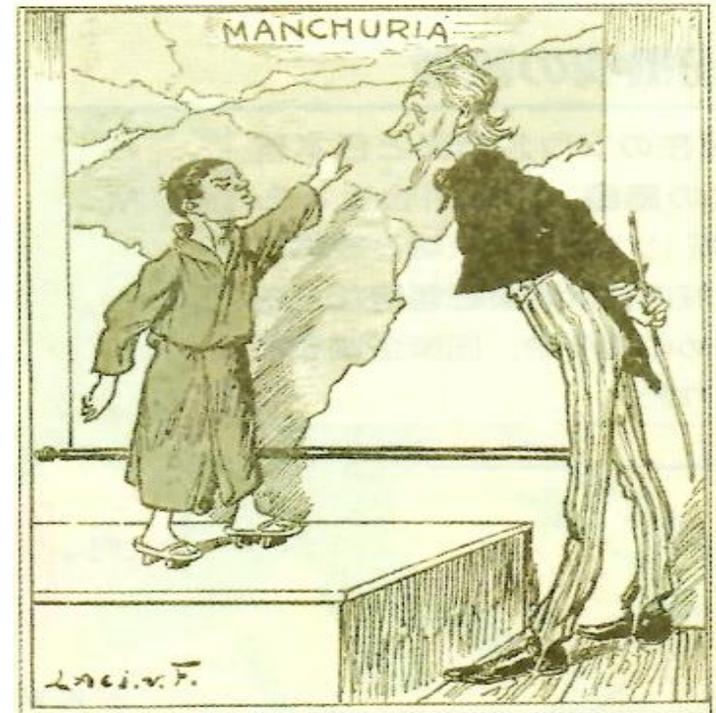
③ **アメリカの「満州中立化」構想**

中国の民族運動と結び満鉄並行線建設
などを計画

⇒ ④ これに対抗し **日露協商締結**

ロシアとの間で、満州、モンゴルの利権を分割

⑤ アメリカの反日感情の高まり = **日系移民排斥運動の激化**



「何がほしいんだ」
「あなたの世界地図に少し変更を加えたいだけだよ」

「坂の上」の風景～帝国主義列強の一角に

1905 **日英同盟**改訂…適応範囲を **インド**に拡大

1905 **桂タフト協定**

…**アメリカのフィリピン支配権**を確認

1907 **日仏協商**…相互利益と安全を保護

→**ベトナム留学生追放**・ファンボーイチャウ離日

1907～ **日露協約**

…**「満州」モンゴル**での相互の利益擁護

1910 **韓国併合** = 「**韓国**」の植民地化

1915 **二十一か条要求**

= **山東省利権**・**関東州租借期間延長**



ファン＝ボーイ＝チャウ
(1867～1940)
ベトナムの民族運動家
ベトナムの青年を日本に留学させる東遊運動(ドンズー運動)をすすめたが、日仏協約により1909年に国外退去させられた。

「坂の上」を描かなかった司馬遼太郎 ～唐突に終わる「坂の上の雲」～

「坂の上」＝日露戦後の日本

①目標を見失う日本⇒「明朗な時代」は終わった？

軍部の横暴

「民衆の警察化と警察の民衆化」

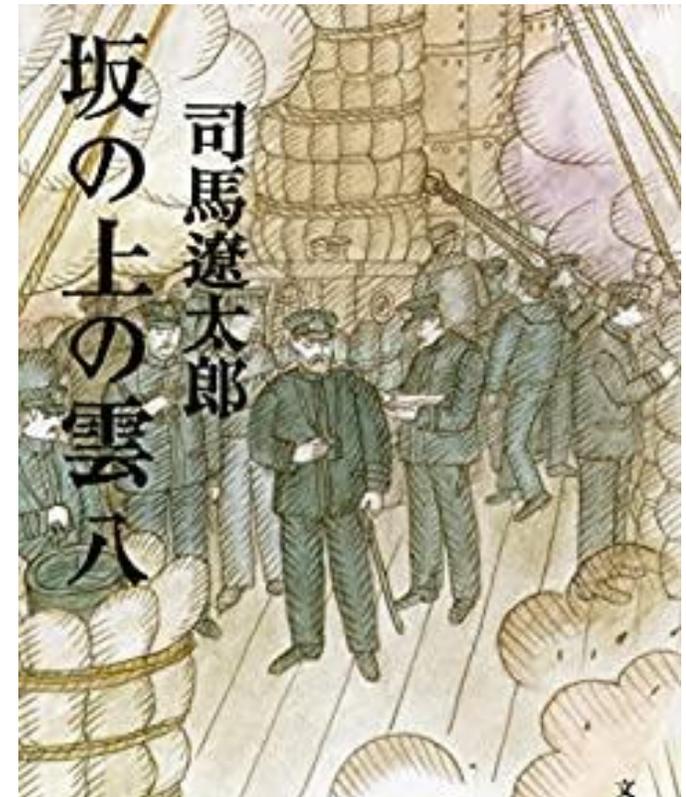
「時代閉塞の現状」(啄木)「滅びるね」(漱石)

②民衆が「国民」となったことは幸福だったのか？

帝国主義国「列強の一員」としての苦悩

③アジアの人びとの歓迎と落胆

⇒「愚劣な昭和」の出発点としての日露戦争



「坂の上の雲」は日本海海戦で事実上終了し、話は後日談へと移っていく。